ヒタチノヒトタチ

ヒタチで活躍する さまざまなヒトタチに インタビュー！

「東京ブギウギ」で一世を風靡した戦後の大スター、笠置シヅ子をモデルにしたNHK連続テレビ小説『ブギウギ』。

このドラマの脚本を担当されたお一人が、日立市出身・在住の脚本家、櫻井剛さんです。

今回は、櫻井さんに『ブギウギ』の脚本を手掛けるきっかけや脚本家としての活動について伺いました。

問合せ　広報戦略課　☎ **内線 314**　FAX 21-4859

脚本家

櫻井　剛さん

1977年　日立市生まれ。専門学校東京ビジュアルアーツ映画演出専攻卒業
2001年　『青と白で水色』で日本テレビシナリオ登竜門大賞を受賞
2005年　映画『ゴーグル』で監督・脚本を手がける。
2011年　TVドラマ『マルモのおきて』で本格的に脚本家デビュー。以後、『ビギナーズ！』、『ミス・パイロット』、TVアニメ『ONE PIECE』など、多くの人気作品を執筆
2022年　NHK夜ドラ『あなたのブツが、ここに』で、第60回ギャラクシー賞を受賞

「ずっと〝朝ドラ〟の脚本を書いてみたかった」

―『ブギウギ』の脚本を手掛けることなったきっかけは？

以前、NHK夜ドラの脚本を書いたのですが、その時のプロデューサーが『ブギウギ』の制作を担当されていて、「今度は朝ドラを書いてみませんか？」とお誘いいただきました。ずっと朝ドラの脚本を書いてみたかったので、とても嬉しかったですし、気合いが入りましたね。

―『ブギウギ』の脚本は、二人体制で書かれているそうですね。

はい、メインの脚本家が足立紳（しん）さんで、僕は第9・10週と第13～16週、第20～22週の脚本を担当しています。足立さんが作り上げたそれぞれのキャラクターを引き継ぎつつ、僕ならではの表現で登場人物の心の動きや人間味あふれる姿をできるだけ丁寧に描きました。

―朝ドラの脚本を書くことは、大変ですか？

そうですね、担当する週の一話一話を必死で書いていました。『ブギウギ』の脚本は二人体制で書いていたので、ストーリーに違和感が出ないよう、足立さんや各週を担当する監督と打合せを重ねて脚本を仕上げました。

―そもそも、どうして脚本家になろうと思ったのですか？

子どもの頃から映画が好きで、映画を作る仕事をしたいという思いから脚本家につながったという感じです。

映画制作の専門学校を卒業後、力試しで書いたテレビドラマの脚本で賞を取って、そこから脚本家の道が開けました。

受賞後しばらくは、賞金で自主映画を作ったり、好きなことを続けていたのですが、脚本を一人でコツコツ書くという工程が好きで得意だったし、映画監督よりは脚本の方がまだ芽があるかなと思い、脚本1本に絞ってやっていく選択をしました。

―脚本ってどのように書くのですか？

人によって違うと思いますが、僕の場合は頭の中で映画やドラマを見るみたいに再生し、それを書き起こすという感じです。

＊櫻井さんインタビューの全文は
市ＨＰで配信中！

若い人たちには自分が好きだと思うことにチャレンジしてほしい

以前、常陸多賀にあった映画館に、よく通っていたという櫻井さん。「シネコン（大きな映画館）にはない独特な雰囲気が好きで、自然と“いつか映画を作る仕事がしたい”と思うようになっていました」と学生時代のエピソードを語ってくれました。

とにかく頭の中で何度も物語を再生して、話がスムーズに流れていないな、おもしろいストーリーにならないなと思ったら、視点を変えたり、シーンの順番を入れ替えてみたりしながら書き直すという作業を繰り返します。そうやって話がおもしろく展開していったときにはとても嬉しくなりますね。

―　どのようなところから着想を得るのですか？

僕の場合は、「あ、これドラマに使えるな」とか思うことはあまりなくて、普段の生活の中での自分の体験をヒントにして書くということが多いですね。

以前、女性パイロットが主人公のドラマのときは、空港に行って脚本を書きました。やっぱり、部屋で書いているのと空気感が全然違いますよね。ホームドラマのような作品であれば、自分の経験で十分なのですが、何か脚本の手掛かりになるようなものがほしい場合は、少しでも作品のテーマに近い環境に身を置いて書くようにしています。

「日立で生活している方がずっといい仕事ができる」

―　日立市でお仕事をされているのはなぜですか？

以前は東京で生活していたのですが、コロナの影響でリモートワーク中心になったので、もう東京圏に住む理由がなくなりました（笑）

日立にいて、不便さは全く感じないですね。実家もありますし、家族と一緒に生活している方がずっといい仕事ができます。

僕はよく市内のコーヒーショップで仕事をするんですけど、そこに行くときドライブしながら眺める海の景色は、何度見ても本当に素晴らしい。日立で生活して、視野も広がったと思います。

「家族との生活での〝気付き〟を作品に反映していきたい」

―　脚本家として今後どのような活動をしていきたいですか？

僕はヒューマンドラマとかホームドラマが得意分野だと思っているので、自分が日立で家族と生活する中での体験とか〝気付き〟のようなものを作品に反映できればいいなと思っています。

―　最後に、日立の若者たちにメッセージをお願いします。

若い人たちには、興味があるとか、自分が好きだと思うことがあったら、とりあえずチャレンジしてみることがすごく大事だよって言いたいです。覚悟なんて決めなくていいし、合わなければやめて別の道に行ってもいいと思います。

まずはやってみたいと思ったことを始めてみて、走りながら自分にとってのゴールを見つけていけばいいんじゃないかと思います。